
フランス人形

松本 由樹彦

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

フランス人形

【Nコード】

N6504D

【作者名】

松本 由樹彦

【あらすじ】

真冬の路地裏で中年男をナイフで刺しまくっていたのは、隣のク
ラスのあの子だった。始まった運命。君と僕の残酷で静かな日常。

チャプター 1

吉川が男を殺していた。

一月の路地裏で、ダッフルコートとレインコートを着た吉川が男の左胸にナイフを突き刺していた。

通りの角を曲がったとき、僕の視界に飛び込んできたのはそういう光景だった。

吉川は手首を回転させて男の心臓をこねまわすのに夢中で、僕はわきの生垣にもたれてマフラーを巻きなおした。男の胸からは真っ黒な血液が溢れ出していた。吉川がナイフをゆっくり抜くと、男はずるずるとくずれ落ち、吉川の足にすがりついてから、うつ伏せに倒れた。

吉川は足を振り上げ、男を仰向けに転換させる。それから体を反るほど大きく振りかぶり、逆手に持ったナイフを男の胸に深く突き立てた。何度も。男の胸から血が噴き出し、吉川に飛散する。吉川はそれを気にする素振りを見せずに、たんとんと冷静に殺人スクワットを繰り返していた。立ち上がり、振りかぶり、しゃがみこみ、突き刺す。

やがて吉川は直立の姿勢で動きを止め、しばらく、完全に動けなくなつた男を眺めていた。さすがに少し呼吸が乱れたようで、肩を揺らしながら小刻みに白い息を吐いている。ナイフを一振りして血をはらい、革のケースにしまい、さらに鞆にしまった。そして入れ替わりに出してきたウェットティッシュで返り血にまみれた顔を拭いて、レインコートのフードを脱いだ。

その殺人者が隣のクラスの吉川世梨だと、僕が気付いたのはこのときだった。

精緻な技巧で作り上げられた中世の彫刻のように白く、美しい顔立ちは学校で見るそれと変わらない。まるで違うのは表情だ。普段

の愛想のいい笑顔は影もなく、無表情。それもただの無表情というのではなくて、たとえば人体模型のそのような、人工的で冷やかな感じのする完全な無表情だった。

吉川が僕を見た。

古い外灯の薄暗い明かりの下ではつきりとは見えないが、それでもやはり何の感情もつかがい知ることとはできない。驚くでもなく、逃げるでもなく、ガラスのような静かな瞳で無感情に僕を捉えていた。

僕は吉川に近づいた。

「殺したの？」

「そう」

そばに立って死体を見下ろす。四十過ぎの男だ。太ってもなく、痩せてもなく、禿げてもないやや小柄な中年男が目を見開いて死んでいた。吉川が執念深く刺しまくった胸の辺りは、皮膚がめくれめぐちやくちやになっていた。

「いつから見てた？」

吉川が血のスプレーを吹き付けられたレインコートを脱ぎながら言った。

「多分、最初に刺したところから」

「ふうん」

吉川は裏返った蛾の死骸を見るような目で死体を見た。ようやく感情を表わし始めた。

「私のリサーチによると、ここはこの時間、誰も通らないはずだったんだけどな」

「リサーチ？」

「ここ一ヶ月、日曜の夜七時から八時の間にこの路地裏を通る人間は一人もいなかったのに」

吉川は迷惑そうに言った。

「僕もいつもは通らない。今日はたまたま、ここを通りたくなかったから通った」

吉川は小さなため息と白い息を吐いた。

「それより、ずいぶん落ち着いてるのね」

「そう?」

「たまたま通りがかった道で人殺しの現場を目撃した人間の反応としてはかなり異例だと思うんだけど」

「殺してるな、とは思ったけど」

「もしかして、人殺したことある?」

「ない」

吉川はまた煙のような息を吐く。

「……変わってるのね」

そう言つと吉川はしゃがみこみ、レインコートで死体を包み始めた。

僕がそろそろ帰ろうかと思っていると吉川は、「ついでにちよつと手伝つてくれない?」と言つて、死体の首を持ち上げた。

「埋めるの」

「いいよ」

吉川はニヤリと笑つた。

「足のほうを持つて。大丈夫、誰も来ないわ。リサーチ済みよ」

そのリサーチ結果がどれほど信頼できるものなのか、頭の片隅で少しだけ気にかけてながらも、僕は言われたとおりにした。

「血は?」

死体を持ち上げると、舗装されていない道路に血溜まりができていた。死体からも血が滴る。

「天気予報見てないの?今晚遅くから二十四時間ぶつ続けで大雨よ。きれいに洗い流してくれるわ」

「雨が降る前に誰か通つたら?」

僕の質問は吉川をイラつかせてしまったようで、

「だからそんなイレギュラーな奴あんたくらいでしょ。もし誰か通つてもそこから捕まるようなヘマしてないわよ」

と、断ち切るように言われたので、僕はそれ以上話すのをやめた。

フランス人形

チャプター2

僕と吉川は一本となりの道を挟んだ空き地に死体を運んだ。

そこは高いフェンスに囲われた広大な土地で、六年前までは市営のスポーツ施設があつたがすでに取り壊され、それ以来未開発のまま。今ではセイタカアワダチソウの聖地だ。

フェンスには一ヶ所だけ中に入りにできる扉があり、当然そこは施錠されていたのだが、吉川がコートのポケットから鍵を出して事もなげに開けた。

「計画的犯行だからね。あらかじめ合鍵を作っておいたのよ。お母さんが市の職員でさ」

尋ねていないし、訝しげな視線を送つたつもりもないのだが吉川は僕にそう釈明した。

吉川の指示に従い、死体を運んだ。僕が前を歩いたのだが、真つ暗闇の中を後ろ向きに歩くはめになつたので何度も転びそうになつた。僕と吉川の姿は夜の闇と育ちすぎた帰化植物が隠した。まあ、隠されなくても誰もいないし、こんなところにこんな時間に来る人間がいけないことはリサーチしなくてもわかる。

空き地の真ん中辺りに差し掛かると、吉川は突然立ち止まり、目を凝らして周囲を見渡した。

「あつた」

吉川はそう言うと、予告なしに死体から手を離して走つた。地面に死者の後頭部が打ち付けられる。僕が死人の足首を握つたまま立ち尽くしていると、吉川がシャベルを引きずつて戻ってきた。工事現場サイズの真新しいシャベル。まだ値札が付いていた。これもあらかじめ用意していたらしい。

僕は吉川と交代で穴を掘つた。深くて、広くて、暗い穴。

吉川が鞆から懐中電灯を取り出して地面を照らした。土の中には大きな石がいくつも混じっていて、僕たちはそれを砕きながら少し

ずつ掘り進めた。

「こいつが誰で、どうして私に殺されたのか、聞かないの？」

僕が特大の石を砕こうとシャベルを叩きつけていたとき、背後で吉川が言った。

僕は手を休めずに、「聞いたほうがいい？」と言った。

「どっちでも」

「この男は誰？」

「お父さん」

僕は砕くことを諦めて、ここで持ち上げる作戦に切り替えた。

「何でかは？」

僕はシャベルを立てて振り返った。

「聞いてほしいの？」

「この状況で聞かれないほうが気になるでしょう？あんたはどうやら変態みたいだからそれでいいかもしれないけど、私は普通の人間なのよ」

父親殺してどこが普通だ。それに誰が変態だ。

僕は他人のプライベートにそれほど関心を持たないし、できれば首を突っ込みたくない。それにそういうことは結局聞かないほうがいいことの方が多いのだが、

「……………」

聞くしかなさそうな沈黙。

「……………どうして殺したの？」

「……………」

……………って言わないのかよ。

僕は無言で作業を再開した。しかし、何というか、そういう風にされると気にならなくもないというか、むしろ気になる。

「……………血が繋がってないとか？」

「そのほうがまだよかったな……………」

吉川の声にメルヘンスパイスが少し混じる。

「……………虐待？」

「性的虐待」

聞かなきゃよかった。

僕は音のないため息をついて、ようやく掘り出した巨大石を穴の外に転がし出した。

「どんなことされたか、聞きたくない？」

「…言いたいなら聞くけど」

僕はうんざりしながら言った。

背後で吉川の控えめな笑い声。

「言いたくないわよ。恥ずかしいし、思い出したくもないわ。もうこの話はおしまい。さっさと埋めましょう。ここは寒いし、雨が降りそう」

そう言って吉川は天上を見上げた。確かに言うとおり、すでに黒い雲が空を支配している。真冬の風がびゅうと吹きつけ、草木を薙いで、吉川の髪を舞い上げた。吉川は乱れた髪を撫で付けて、父親を墓に蹴落とした。躊躇いも、別れの挨拶もなかった。そして僕に掘り出した土を戻すよう指示した。どうやら吉川は残りの作業をすべて僕に託すつもりらしい。斜め後ろに立って僕を監督するように、死体にスポットライトを浴びせる吉川。僕は目を開いたままの吉川の父親にバラバラと土をかけ、やがて死体は地中に埋没した。まだ穴は半分しか埋まらない。僕は黙々と作業を続けた。

「それにしてもあなた、よくこんなところまで着いてきたわね」
うしろで吉川が独り言のように言った。

僕は穴埋めを続けながら、「どういう意味？」と尋ねた。

「目撃者はあんなただけなのよ。それは私にとつて予想外の出来事。あんたは私のシナリオにいない登場人物。あんながいなければ誰にも知られることはなかった。私の計画は狂ったの」

吉川は平坦な声でつらつらと述べた。

「それで？」

「私があんたをそいつの隣に埋めようとしているとは、考えられなかった？」

明かりが消された。

「私はすぐにもあんたを殺すことができるんだよ？」

振り返る。暗闇。だしぬけに明かりが消されたからなおさら見えない。外灯も月明かりもなく、街の明かりはほど遠い。うっすらと吉川の体のラインが見えた。コートを着けていても細い。次第に目が慣れてくる。吉川の右手の先には鋭利な銀色のナイフ。表情が見えないまま、僕と吉川は向かい合っていた。

「僕を殺すの？」

「殺すよ」

冷淡な声。

「それはちよつと、困る」

程なく吉川のシルエツトが小刻みに揺れる。声を潜めて笑っているように見えた。

「他人事みたいに言うのね」

吉川は空き缶を捨てる程度の気軽さで、ナイフを穴に放った。

「安心して。あんたは殺さないことにするわ。もしここで泣き叫んだり錯乱したりしたら、それこそメツタ刺しだったけどね」

僕は土をすくって、ナイフに被せた。

「黙っててくれるんでしょう？もうあんたも共犯よ」

「誰にも言うつもりはないよ」

誰かに言えるわけがないだろう。

「それがわかったからナイフを捨てたんだらう？」

「ナイフは一本とは限らないでしょ？」

見えないはずの吉川のニヤリ笑いが目に浮かぶ。

僕はもう一度、吉川に向き直った。

「誰にも言わないよ」

誓いを立てるようにそう言って、さらに何か付け足そうと思ったけれど、あまり頭が回らなかった。寒いのだ。手がかじかんで、指先の感覚がない。

それでも吉川は満足そうに笑った、ような気がした。

予想通り、穴塞ぎは全部僕の仕事だった。かき出した土と石を埋め、人為的に見えないように気を配りながら冬枯れの草を被せた。できれば明るくなってから確認したいが、誰もこんなところで熱心に目を凝らしたりはしないだろう。ずっと再開発の予定も噂も聞かない。

「助かったわ。正直な話、一人で運んだらずいぶん大変だったと思う」

「いいよ」

ちなみにシャベルを担いでいるのは僕。

「何かお礼をしたほうがいいかしら？」

その質問はフェアじゃない。問いかけられたらこう答えるしかない。

「別にいい」

吉川はふつと笑顔を作った、ような気がした。

「行きましょう」

シャベルで障害物を確認しながら道なき道に行く。やはり僕が前を歩いて、安全を確認した上で、吉川がついてくる。すでに小雨がぱらぱらと降り始めていた。

「あんたの家つてここから近い？」

「歩いて五分」

「そのシャベルあげるわ」

うれしくもなんともないが、もらっておくことにする。

フェンスの外に出た。吉川はいつの間にか折り畳み傘を差していた。扉を閉めて鍵をかけると、吉川は両腕を真上にピンと伸ばして大きな伸びをした。

「オーケー。完璧じゃないけど完了ね。これで私も明るく朗らかに

生きていけるわ」

外灯の下で吉川の目くばせ。

「それはよかった」と僕は言った。

吉川とは帰る方向が逆らしい。この場で別れることにした。

「あんた名前は？」

「岡部孝樹」

「オカベタカキね。またどこかで会ったらジュースでもおごってあげる」

薄々感づいてはいたが、吉川は僕が同じ高校の同学年で、隣のクラスの一構成員だということにまったく気付いていなかった。僕と吉川が言葉を交わしたのはこれが初めて。

「じゃあね」

吉川はそう言い残して手も振らずに立ち去った。

しとしと降る冷たい雨に打たれながら、日本人形のように真っ直ぐ伸びた黒い髪が夜闇に完全に取り込まれるまで、僕は吉川の背中を見ていた。

吉川は最後まで名乗らなかった。

チャプター3

翌日。

予報通りの大雨になって僕はいつもなら自転車で行く通学路をあまり役に立たない傘を差しながら時間をかけて登校した。教室はすでに濡れた制服特有の嫌な臭いが充満していたが、今日は一時間目から体育なので、この悪臭からはしばし解放される。

僕が通っているのは私立黒柳高校という高校で、一応、県内有数の進学校ということになっている。僕はその一年D組に属していて、昨日、父親を殺して埋めた吉川世梨は一年C組。

体育はC組との合同授業なので、僕は自分の意思とは無関係に吉川の姿を確認することができた。

体育館を半分に区切り、男子は剣道、女子はバスケットボール。突如始まったトーナメント戦で早々に敗退した僕は、剣道とバスケの観客になった。天井から吊るされたネットで仕切られた向こう側では、背中まである髪を後ろで束ねた吉川がビブスを付けてコートにいる。

バスケ経験者なのか、重心の低いドリブルで敵陣を切り裂き、意表を突くノールックパス。非の打ち所のないフォームでジャンプシュートを沈めて、チームメイトとハイタッチ。はしゃぐ吉川。満開の笑顔。普段と何も違った様子は見えない、いつも通りの吉川世梨。そんな吉川を見ると、昨日、あれだけ確かだったことが夢であつたような気がしてくる。彼女が人を殺したなんて、考えるだけでも咎められそうなことなのだが、やはり事実。今朝、うちに土の付着したシャベルがあつたから。

「だー、負けちまつたぜ」

くぐもつた声を上げて僕の隣に座る覆面男。面を外すと締まりのない顔が現れた。僕の友人、武田だ。

「中学のとき剣道部だったんじゃないの？」

「C組の葛西にやられた。あいつ、現役の剣道部だからな。汚ねえよ」

「別に汚くはないと思うけど」

「…てゆうかお前、さつきから誰見てんだよ？」

僕は武田を無視して吉川に注目し続ける。

「んあ？もしかして吉川か？いまさら吉川か？」

「いや、ちゃんと見たことなかったからさ」

「ちゃんと見たことないわけねーだろ。『黒柳スリートップ』の一角にして、最高峰だぞ」

残りのツートップのことは知らないが。

武田は僕の側頭部を両手で挟み込んで、ぐるぐる回してから振り向かせた。

「あきらめてくれ。無理だ。お前も知ってるだろ？吉川の称号」

「…『黒柳の姫』、だっけ？」

乱れた髪を直しながら、白々しくそう言って、ついでに馬鹿馬鹿しくなった。

去年の十一月の文化祭。吉川は『ミス・黒柳』といういささか時代遅れ感すら漂うタイトルを獲得していた。ちなみにこれは目立ちたがりのうぬぼれ屋がわざわざエントリーするタイプのものでなくて、全校生徒が対象の投票によって決められる。すでに在学中の三連覇は確実にまで言われていて、ついたあだ名が『黒柳の姫』。さすがにそれは誇張しすぎだと、僕は思っているのだが。

「そ。とにかくそこらの女とは格が違う。あんな可愛い人間見たことないし、あれだけ美しいって言葉がバチっとはまる十六歳はそうはいねえぞ。見るよ。あのパウダースノーな白い肌、抱きしめたら確実にへし折れる華奢かつナイスなプロポーション、なにより完璧で可憐で芸術的な顔はとにかく凄え。あんな天使見たことねえよ。しかも性格もいいんだよな。いっつもニコニコしてて、誰にでも分け隔てなく優しい。大体、普通あれだけモテると少なからず同姓に

妬まれそうなもんだろ？それがまったくないってのが吉川の素晴らしいところだ。女子のファン層も厚いんだよ。何も男の票だけで『ミス・黒柳』獲ったわけじゃねえんだよ。生徒会がやってるボランティア活動にも参加してるんだぜ。マジ、リアル女神だよなあ。だからみんな吉川のこと大好きなんだよ。俺の知ってるだけでも、サッカー部の八島さんとかラグビー部の初芝さんとか、同級だと特進の東とか、その辺。黒柳の中心人物は大体吉川だな。でももう誰も下手に手が出せない状態っていうかさ、特に文化祭以降はおこがましくて、ものにしようって奴はほとんどいないんじゃないかな。とにかく、みんなの姫で天使で女神な吉川がフリーっていうことだけで、黒柳の男たちはこの上なくハッピーなんだよ」

武田は忌々しいくらいに熱く語った。

僕が、「ちよつと崇めすぎじゃないか？」と言うと、武田は僕の肩にスピーディーなジャブを放った。

「すぎじゃねえよ！姫だぞ！だからな、ま、そんな度胸はないと思うけど、もしお前みたいな半端に頭が良いだけのノーマルメガネが言い寄ったとしても完全無視、無味無臭、……て、無視はしないか。吉川は優しいからな。すごく申し訳なさそうに、心を込めて、めちゃくちゃ可愛く『ごめんなさい』って言ってくれるだろうよ。だから、おとなしく隠し撮りでもして、額に入れて枕元に置くくらいで我慢してくれ。…あ、やっぱりやめろ。写真の吉川が可哀相すぎる」僕が肩を殴られた辺りからうんざりして、剣道の準決勝を見ていた。

三時間目と四時間目の間の休み時間。

僕が自分の席に座ったまま、何もせずに世界史の授業を待っていると、吉川が一人でD組に入ってきて、僕の二つ前、遠山美奈の机の横で足を止めた。吉川の入室により、教室内の空気が少し変わった。

「美奈美奈！現国の教科書忘れちゃったんだー。貸してくれない？」
そう言って、遠山を拝むポーズ。やはりいつも通りの吉川だ。元
気で明るい人気者。

遠山はニツコリとうなずいてから、席を立った。どうやらロッカ
ーに教科書を入れていたらしく、僕の真横を通り過ぎて、教室の後
ろに設置されたロッカーへと向かった。

吉川は遠山を待つ間、窓の外を眺めていた。僕は吉川の見ている
グレーの空に目をやった。予想通りの大雨で血が洗い流されていく
さまを思い浮かべているのかもしれない。

僕が机の横にかけた鞆から世界史の教科書を出していると、前方
からの強い視線を感じた。

吉川が体は窓に向けたまま、首を斜めに傾けて僕を見ていた。僕
は気づかないふりをして、顔を伏せて教科書を開いた。吉川も声を
かけてこない。確信が得られないのだろう。今の僕はメガネをかけ
ているが、学校外ではかけていない。昨日もそう。

遠山が戻ってくるまでのわずかな時間、吉川は眉を寄せて、思わ
ず顔を上げてしまいそうになるシリアスな目光線を僕に浴びせ続け
ていた。

その日の授業もすべて終了。

雨は絶え間なく降り続け、僕は一緒に帰ろうという武田他、友人
の誘いを断り、教室にとどまった。

昼休みのことだ。遠山に教科書を返しに来た吉川が、帰り際に僕
に紙切れを押し付けてきた。一瞬のことだったので誰の目にも止ま
らなかつただろう。そのノートの切れ端には「残ってて」と、殴り
書き。

最後まで帰らなかつた女子の一団もいなくなり、教室には僕だけ
が取り残された。誰もいなくなつた教室の気温は低く、僕は制服の
上にダウンジャケットを重ねた。

雨雲に覆われた冬空は夜のように暗く、蛍光灯の明かりに照らされた僕の姿だけが窓に映る。僕は目を閉じて、大粒の雨がガラスを叩く音に身をゆだねた。

どれほどの時間が経過しただろう。やがてゴムがはがれるような靴音が雨音に混じり、それは次第に大きくなり、僕の直前で音は消え、代わりに人の気配がした。

「オカベ…、タカキ……………」

僕はゆっくりとまぶたを開く。

吉川が僕を見下ろしていた。

昨日と同じ、無表情で。

チャプター4

「まさかあんたが黒柳で、しかも隣のクラスだったなんてね」

僕の前の席に横向きに腰を下ろしている吉川が言った。僕はメガネを外してケースにしまった。

「昨日手伝ってくれた男の子が美奈の二つ後ろの席で退屈そうにメガネかけてるなんて思いもしなかったわ」

「僕はかれこれ一年くらいここにいたんだけどね」

「私のこと、知ってたんでしょ？」

「知ってた」

「何で言わなかったのよ？」

「そんなことを言ったら、僕は殺されてたんじゃないかな」

吉川は僕を非難する目を向けた。僕はそのむやみに透明感のある瞳を見返す。明るい場所で吉川と顔を突き合わせるの初めてのこととで、昨日は暗くてはつきり見えなかったが、やはりというか、よく出来た顔だと思う。

「ねえ」

「なに？」

「ちよつと話したいんだけど、場所変えない？あんまり人に見られたくないの」

「いいよ」

僕は立ち上がる。

「僕ももう少し知っておきたいことがある」

吉川は目に感情を浮かべずに、唇の端を吊り上げた。

キャメルブラウンのダッフルコートを着込んだ吉川と並んで、傘を差して校舎を出る。とっくに下校時間を過ぎていたので、昇降口の人影はなかった。吉川は何も言わずに、正門とは反対の方向に歩

き出した。僕も黙って後に続く。フードをすっぽりと被り、鼻の先までマフラーに埋めて、水溜りをかわしながらスタスタと歩いていく吉川。よほど人に見られたくないのだろうが、それは僕にとっても同じことで、こんなところをクラスの誰かに見られたら明日何を言われるかわからないし、サッカー部のなんとか先輩とかに見られるのも面倒だ。吉川は一度も振り返らないまま、テニスコートを通り越し、石畳の裏道を抜けて、そこからさらに十分ほどよどみのないペースで歩き、やがて県道沿いの畑の間にぼつんとたたずんでいた喫茶店へと僕を連れて行った。

『喫茶・軽食 ロレンス』と書かれた古い看板の文字は今にも消えてしまいそうに薄く、陳列ケースのメニューサンプルには埃がうつすらと積もっている。ひどくうらぶれた店で、事実、店内に客は一人もいなかった。店主と思われる白髪の老人が一人、カウンターの裏でお茶を飲みながら相撲中継を見ているような店だった。そこには畳が敷かれていて、老人はコタツに入っている。吉川も初めて来たようで、物珍しそうに店内を見回していた。確かにここなら誰にも見られる心配はなさそうだ。間違っても高校生のたまり場になるような店ではない。窓際にひび割れた鏡餅があり、カウンターの隅に黒い招き猫が置かれ、壁には販促品のカレンダーが掛けられていて、その左上で黒縁の丸時計がおよそ二十分遅れの時を刻んでいた。石油ストーブが過剰に設置された店内は暖かく、僕と吉川は上着を脱いで、奥の四角いテーブル席についた。吉川は年季の入った革のソファに、僕は夏が似合いそうな藤椅子に腰を下ろした。

老マスターの仕事は意外なくらい手際がよく、僕たちの注文したホットドリンクを驚くべき速さでこしらえてテーブルに運ぶと、また湯飲み片手の相撲観戦へと舞い戻った。

「あのおじいさんは相撲が好きなんだわ」

吉川が見たままの感想を無意味に述べてホットココアをすすったので、僕もホットコーヒーを傾けた。いたってまともな味。

「おびただしく降るわね」

吉川が曇った窓ガラスを手で拭いて外を眺める。

「リサーチ通りなんだろ？」

「まあね。でもちよつと降りすぎたかな」

吉川はそう言って少し困った顔をした。ここまで来る間にもずいぶん濡れてしまった。吉川は空いている椅子の背もたれにコートをかけて乾かしている。僕もそれにならった。

「お父さんがいなくなって、誰も不審がってはいないの？」

吉川はカップに口をつけたまま小さく首を振る。

「全然。あいつがいなくなるのはよくあることだし、いないほうがむしろ普通。お母さんもあいつが帰ってこないからって何も言わないわ。いないほうがいいんだから」

吉川の話によると、吉川の父親は吉川が生まれる前に一度、蒸発したそう。ずっと母親と二人で暮らしていたのだが、吉川が中学に上がる頃になって突然帰ってきて、居座るようになったという。

吉川が父親を見たのはそのときが初めてだったとのこと。

「それからは地獄の日々よ。お母さんは殴られるわ、私は犯されるわ」

「その話はいいよ」

吉川はきょとんとして僕の目を覗き込み、面白そうに微笑んでから、背もたれに身を預けた。

「ま、とにかくあいつがいなくなっても誰も探したりはしないの。少なくとも今すぐにはね」

「ふうん」

僕はコーヒーカップに口をつけた。少しぬるくなってきた。客の来る気配は一向にない。老人は14型のテレビ画面から片時も目を離さない。

「それにしても」

吉川は嘲笑うようで苦々しくもある顔を形作った。

「岡部みたいな変わり者が隣のクラスに潜んでいたなんてね」

「僕はいたって普通だし、潜んでいたつもりもない。吉川に気づか

れないくらいに普通だよ」

「知らなかったものはしょうがないじゃない。それにメガネだとは思わないしさ。なんで学校でメガネかけてるの？」

「キャラ作り」

吉川はとたんに吹き出して、「やっぱり変ってるわ、あんた」と言つて、ケタケタと笑い続けた。僕は黙つてその奇妙な笑いがおさまるのを待った。

「なんの意味があるの？そのメガネキャラに。メガネをかけると人格が変わるの？」

「意味なんてないよ。学校での僕と、それ以外の僕を分けたいんだ」とすると吉川は意外にも感心したような顔をして、

「へえ…。それは私も同感だな」

「吉川も学校じゃ父親を刺し殺すようには見えないよ」

吉川は鼻で笑う。

「父親を刺し殺しそうな女子高生ってどんな見た目だろうね」

なにやら思い浮かべているようだが、言うまでもなく、僕の目の前には父親を刺し殺して埋めた女子高生がいる。吉川はテーブルに無造作に置いていた携帯電話のディスプレイを光らせて、正確な時間を確認した。

「そろそろ行きましようか。ちょっと用事があるの。今日はおごつてあげるわ。約束したしね」

「悪いね」

吉川は、「いいわよ」と言いながら立ち上がり、中腰の姿勢で静止して、なにやら逡巡してから、逆再生のようにソファに戻った。

「私たち、時々会わない？」

何を言い出す。

「岡部みたいな奴って貴重なのよ。あんたわかつてないかもしれな
いけどさ。こういうのあんまり言いたくないんだけど、私ね、かな
り疲れちゃってるのよ。岡部的に言つと学校キャラ？私って明るく
楽しく素直で優しい、みたいなイメージあるでしょ？」

「それどころか神格化されてるよ」

吉川は迷惑そうにうなづく。

「そうね。特に『黒柳の姫』とか言われだしてから余計そういうのが一人歩きしちゃって、もううんざり。大体、いまだき高校の文化祭でミスコンなんて、時代遅れもいいところよ。ボランティアとか興味ないのにやらざるを得ない感じだし、今日もこれからクラスの子のバースデーパーティーなんだけど行きたくない。そういうの面倒くさいし、つまらないの。プレゼント代もかかるしさ。飽きたわ」

「僕といてもつまらないと思うけど」

「つまらないの種類が違うのよ。岡部は私がつまらない顔しててもどうせ何も気にしないでしょ？私の『お友達』はさ、私がちよつとでも笑ってなかったら、『世梨、どうしたの？どっか痛いのか？』ってうるさいのよ」

それは疲れるだろうな。

「だから、たまに岡部みたいな無感動少年のぼそぼそトークを聞いたら案外リラックスできる気がする。現に昨日も今日もなんか楽なのよ。あんた癒しのセンスあるわ」

「はあ」

「ねえ、いいでしょう？」

吉川はテーブルに肘をついて、小さな顔を僕に寄せた。

「別に」

吉川は学校で見せる五分の一くらいの笑顔で僕を見つめてから、立ち上がってコートを着て、伝票を持ってレジに向かった。

吉川は老店主から受け取ったつり銭を怪しげに数えながら、

「あんた、メガネないほうがいいんじゃない？」

と言った。

僕は聞こえなかったことにした。

僕と吉川の家は真逆の方角。

傘を差して、その場で別れた。

フランス人形

チャプター5

ひと月が過ぎた。

この一ヶ月でわかったのは、吉川の言った『時々』が僕の思った『時々』よりも頻繁に訪れるということだ。

当日の授業中に吉川から僕の携帯電話に『4:30』や『5:00』といった数字と記号だけのメールが入り、その時間にロレンスに行くと吉川がいるのだ。僕と吉川はこのさびれた喫茶店の貴重な常連客となった。

僕と吉川の間には共通の話題は何もない。僕は無趣味で、吉川のパーソナルなことを聞くつもりもないし、吉川もまた、個人的な話題を振ってこなかった。毎回ほとんど会話らしい会話もなく、ホットコーヒーとホットココアをゆっくりと飲み、十分くらいで店を出てその場で別れた。

それを週に二回は行った。

ところが、今日はどういいうわけか吉川が映画のフライヤーを持ってきていて、「これ観たいから」と、僕に渡してきた。

単館上映のフランス映画で、聞いたことがあるようでやっぱりない、やはりフランス人の監督の最新作らしい。

「今週の日曜ね」

「僕と行くの？」

「岡部しかないのよ。私の『お友達』はこういうのに興味ないの。僕だつてない。」

「こういう映画を観に行くことは私のキャラに反するの」

それはわかる。この文面とスチールを見る限り、間違っても大ヒットする映画とは思えないし、小ヒットも望み薄だ。僕はチラシを適当に眺めてから、「日曜日は塾があるんだ」と言った。

吉川は家の中で珍しい多足類を見つけたような顔付きで僕を見た。
「何？あんた高一のこんな時期から日曜に塾なんか行ってるわけ？」
「そうだよ」

「何で？」

「親に言われたから」

吉川はあきれたような顔をして、何故か怒り出した。

「あんたには自分の意思ってものがないの？言われるがままじゃない」

「言われたとおりにしておくのが一番無難なんだよ。どんなことでもそう。もし何か問題が起きても他人の責任にできる」

意味がわからない、というふうに首を振ってため息をつく吉川。

「じゃあ、私の言うとおりにしなさい。私のせいにしていいから」

「何を？」

「日曜の塾、休みなさい」

そうして僕はいま、日曜なのに観客が十人もいない小さな映画館でローカルフランス映画を観ている。吉川と。まったく、何をやっているんだろうね。

僕と吉川は朝の九時に地元の駅前で待ち合わせ、電車に一時間揺られて、隣県の県庁所在地まで出掛けてきた。僕たちの住んでいる辺りで少し本格的に遊ぼうと思うとここに来ることになる。

肝心の映画はというと、シユールの極北に単独で位置する、というより行ってしまったようなカルトムービーで、はっきり言って面白くない。内容を簡単に説明すると、十歳の少年が祖父母を迫害し、それを知った両親に山に捨てられ、山の中でオランウータンと意気投合し、オランウータンの家族と共に育ち、少年が十八になったときに母親代わりのオランウータンが捕獲され街に連れて行かれたのを機に山を降り、腹をすかせてパン（フランスパンだった）を盗んでパン屋に蹴られ、そのパン屋が少年の実の父親で、二人は涙を流

して再会を喜び合い、少年は「お父さん！」と絶叫し、父親は「もうお前を離さない！」と雄叫び、がっちりと抱擁を交わし、意気揚々と父親の暮らすマンションへと向かうのだが、実は父親はオランウータンの剥製マニアで、リビングルームには幾多の剥製と並んで少年の母親代わりのオランウータンの剥製が並べられているのだが、少年はそのことにまったく気付かず、そして翌朝、気がつくとも剥製にされていた、という少年は生まれつきオランウータンだった、というつじつまを合わせることを最初から放棄しているとは思えないとてつもなく意味不明な代物だった。それを僕の隣の殺人少女は、若干前のめりになりながら食い入るように見入っていた。どこが面白いのだろう。吉川はパンフレットまで買っていた。理解に苦しむ。

映画館を出ると僕は、吉川の春服物色につき合わされ、CDショップで延々と視聴する吉川を待ち、書店で二万字インタビュー記事をすべて読む吉川の真横に立って突らぬ抗議運動をして、ハンバーガーを食べて、また電車に乗って帰った。それからさらにロレンスにも行ったが、日曜は定休日だったので、いつも通りその場で別れた。

チャプター6

翌日、月曜日。

灰色の空が自殺しそうな寒い朝。ダウンジャケット、ニット帽、マフラー、手袋、メガネと完全武装で登校した僕を武田が駐輪場で待ちかまえていた。両手をわきの下に差し込んで寒そうな格好の武田はどこか重苦しい表情をしていて、開口一番、「遅えよ」と吐き捨てた。僕は自転車に鍵をかけながら、「おはよう」と言った。電車通学の武田と駐輪場で待ち合わせる習慣なんてないし、そんな顔されても困るというか迷惑なだけなのだが、武田は早く校内に入りたい僕を校舎の裏へ引っ張り込んだ。

「なに？」

「……ちよつと混乱してるんだよ。昨日、不可解なメールが届いた。まあ、一人なら笑い飛ばせる内容だ。でもな、複数から同じようなメールが来ると俺としても……」

長そう。

「あのさ、話はちゃんと聞くからとりあえず中に入ろうよ。寒いんだけど」

特に武田は唇がわなわなと震えている。制服の上に何も着ていないからだ。僕は昇降口へと足を向けた。しかし、武田が壁に手をつけて僕の行く手を遮った。僕はため息をついて向き直り、メガネのフレームを持ち上げた。

「わかったよ。で、どうしたの？」

「岡部……、俺も信じられないというか、むしろ信じたくないんだが正直に言ってくれ。全校生徒を代表して言うぞ。お前、昨日どこで誰と何してた？」

「何って、別に」

「吉川世梨とデートしたりしてねえよな？」

デートで。

そのあまりにナンセンスな響きに僕は皮肉を込めた苦笑いで応えようとしたのだが、この寒い中、震えているくせに額に妙な汗を浮かべている武田を見ていたらなんだか気がなえてしまい、仕方がないので、ポケットの中で自転車の鍵をいじりながら昨日の行動を思い返してみることにした。考えるときにメガネをかけているととても便利で、ブリッジを押さえることができる。さて、デート。

「そういう言い方もできるかもしれないね」

「…てことは、マジに吉川と会ってたのかよ」

「うん」

武田は今にも泣き出しそうな顔で口をぱくぱくさせながら耳障りなうめき声を発した。何がしたい。

「……何してたんだよ」

「いや、だから別に。映画観たり…」

「デートじゃねえかよ!」

そんな気分は一切なかったが。

「うわー、うーわー、理解できねえ…。どうなってんだ、なあ。お前いつの間に吉川とそんな仲になったんだよ?」

「一ヶ月くらい前かな。たまに話すようになった」

武田は僕の肩に手を置いて、ぐいと顔を近づけてきた。僕は不快さに負けて顔を背けた。

「……付き合ってるわけじゃないよな?」

「ないよ」

武田は糸の切れた人形か憑き物の落ちた人間のようにガクリと首を前に倒し、裸で百メートル歩いた果てにようやく風呂に辿り着いたお年寄りが出す声をもらした。武田の整髪剤で固めたべとべとの髪の毛が口に付きそうになって、僕はさらに顔を背けた。

「ほんとにほんとだな?」

「うん」

僕は肩を強く握りこむ武田の指を一本ずつ丁寧に剥がした。

「そうか…、よかった。いや、よくはないか…。なあ、一体何がど

うなっいたらそんなことになるんだよ？え？昨日はお前が誘ったの？」

「いや、吉川が…」

武田の絶望が肥大するのが見て取れた。

「マジか……。お前、ほんとにどうやったんだよ？どうしたら吉川がお前なんかに興味持つんだ？お前のどこがどういいんだ？」

「そんなの知らないよ。吉川に聞いてよ」

武田は、「喋ったことねえよ！」と叫んだ。

僕はさすがに面倒くさくなってきたので、武田を置き去りにして暖かな校内へと歩みを進めた。

どうやら。

僕と吉川が怠惰的に街をうろついているところを複数の同級生が目撃していたらしく、その無益な情報はその日のうちにメールにのって駆け巡っていたのだという。放っておいてくれと言いたい。まったく、暇な高校生たちだ。僕も暇だがそんなことはしない。多分、吉川も。

そういうわけで僕は今日、話したこともない他クラスの女子に無遠慮な質問を浴びせかけられるなど、学校中の好奇の的となった。こういう噂はすぐに風化するものだというが、僕が入学以来最も校内の注目を集めた日になったのは紛れもなく確実に、昼休みにはすっかり辟易してしまっていた。

五時間目。

数学のノートを開くと、中に丁寧に四つ折りにされた薄ピンク色の紙が挟まれていた。B5版のノートを切った一枚で、その真ん中に一行だけ、こう記されていた。

『あなたと吉川世梨の秘密を知っています 放課後 教室に残って

いてください』

それだけ。念のため透かしても見たが当然何も浮かび上がらない。僕にこんなことをしそうなのは吉川ぐらいなのだが、その吉川が文面に登場しているし、それに吉川より字がきれいだ。

どうせ、今日噂になっっている件だ。おそらく誰かが朝一番に僕のノートに挟み込んで、放課後に問い詰めてやろうとか考えていたものの、その噂は瞬く間に校内に広まってしまい、結果、大幅にタイミングを外してしまったような、アナログな伝達方法ゆえに生じたタイムラグの産物だろう。僕は誰かのあわれな不発弾のようなそれを元通りに折りたたんで、制服の内ポケットにしまった。

そのとき、携帯電話が振動した。

『4:00』

吉川からの召集。今日は早いな。この状況だ。吉川も色々と問いただされて、参っているのかも知れない。僕は四時にロレンスに行くことと教室に残ることを天秤にかけて、当然のようにロレンスを選んだ。得体の知れない人物からの先の読める呼びかけに応じるよりも、吉川と三十分間無言でコーヒーを飲んでいるほうがいくらかましだ。

まあ、吉川もいまいち得体が知れないが。

ロレンスにて。

吉川は鞆から三枚のDVDパッケージを取り出してテーブルに並べた。

「昨日の監督の代表的な三部作よ」

僕はその中の一つを手にとって裏返してみた。赤い照明の下、ドイベルマンが大きく口を開け、そこから血を滴らせている写真。サベルを構えるフランス女。

「あんたに貸すわ」

興味ない。

僕は無言のメッセージを吉川に送ったが、まったく伝わらなかった。

「昨日のは初めて観る人にはディープすぎたわ。正直に言っているわよ。あんまり面白くなかったでしょ？」

「あんまりね」

僕はごく控えめに言った。

「それだけ観れば良さがわかるわ。私がこの世で最も尊敬して敬愛している人物なの」

「わかりたいかな」

「一週間あげるから全部観て、感想文を提出ね。一作につきルーズリーフ一枚でいいわ」

「何の授業だよ」

僕が何を言っても手応えはなく、吉川がわざわざ持ってきたものを引っ込めるとも思えないので、僕は渋々その三枚のDVDを鞆に入れた。それから、「何か噂になってるけど」と言ってみた。吉川は少し考える素振りをしてから、そんなこともあったわね、という様子。

「そうね。色々聞かれて私もうんざり。あんたも大変？」

「うん」

「あんなの放っておけばすぐ収まるわ。よくあるのよ。ほんと、みんなよく飽きないよね」

吉川はそう言っつて、カップに残ったココアをくうつと一息に飲み干した。

「それとも、何か気にしてるの？」

「別に何も」

吉川はニヤリ、という得意の表情で僕をまじまじ見回してから、ゆっくりと腰を上げた。

チャプター7

帰宅後。

夕食を済ませ、二階の自室で吉川から借りたDVDを観ようか、それとも明日にしようかと考えていると、玄関のベルが鳴り、しばらくして母親が僕の部屋のドアを叩いた。

「お客さんよ」

「誰？」

「女の子よ」

母親はそう言って、嫌な感じの笑みを残して階段を降りていった。僕は部屋の明かりを消して玄関に向かった。そこに立っていたのは遠山美奈だった。同じクラスの遠山とは家が近く、小学校からずっと一緒の学校に通っている。同じクラスになったのもこれで四回目だ。遠山がうちを訪ねてくるなんていつ以来だろう。小さい頃はよく一緒に遊んだが、今では母親同士のほうが仲が良い。

「遠山か」

「こんばんは」

微笑む遠山。僕は耳の裏側を掻いた。

「母さんが女の子っていうから誰かと思ったよ」

「世梨だと思ったんじゃないの？」

遠山は顔をほころばせたまま、僕の目を直視した。

嫌な予感がした。

「ちよつと外に出ない？」

言いながら遠山はすでにドアノブに手を掛けていた。

近所の公園の冷たいプラスチックベンチに遠山と並んで座る。僕たち以外は誰もいない。真上の外灯がやたら明るく、その遙か上空にはみすばらしく赤茶けた半月が浮かんでいた。ふと、白い息が見

たくなって、僕は大きく息を吐き出した。遠山は僕を見て少し笑って、「今日も寒いね」と言った。

「そうだね」

「小さい頃、よくここで遊んだよね」

「覚えてない」

覚えていないわけではないのだが、便宜上、僕はそう返した。およそ遠山がしたがっている種類の思い出話をする気にはなれなかった。僕にとってそれは懐かしくはあるが、別に楽しい思い出というわけではなく、ただ過ぎ去った日常でしかない。遠山の中のそれとはきつと違う。遠山は悲しそうな顔をしていた。しばらく沈黙が続く。特にこちらから話すことはなかった。僕はかすかに揺れる自分の前髪を凝視しながら、遠山が何かを言うのを待った。

「なんで、放課後待っててくれなかったの？」

「あのメモ、遠山だったのか」

「世梨と会ってたの？」

遠山はどこか余裕を感じさせる表情で僕を見る。

「…ああ」

「仲、良いんだね」

「どうだろうね」

僕は苦笑して見せた。遠山は、笑わなかった。

「それとも、運命共同体っていう感じなのかな？」

嫌な予感、的中か。

「どういう意味だよ」

「書いてあったでしょう？孝樹さんと世梨の秘密を知ってるって」

「昨日のことだろ？あれは何でもないよ。吉川が映画観たいからって…」

「とぼけるの、下手だよ」

遠山はくすくす笑って、スローに首を振った。

「一ヶ月前のことだよ」

「あの日、あたしはテニス部の練習試合でさ、いつも朝と夕方にしてるハウザーの散歩に行けなかったの。知ってるよね？うちのハウザー。大きいほうの犬。あたしが家に着いたときにはもう七時を回ってて、それから散歩に出掛けたの。朝も行けなかった上に遅れちゃって、なんだかハウザーがかわいそうな気がしてさ、いつもより長く散歩してあげることにしたの。いつも通らない道も通ってね」
そこで遠山は言葉を切り、僕の顔をうかがうように見て、また話し出した。

「孝樹さんと世梨を見たのは旧スポーツセンターの前。驚いたよ。ありえない組み合わせだったし、それに二人で男の人を運んでいるんだもん。しかも、血が点々と連なってた……」

遠山は探偵にでもなった気分なのか、目頭をつまんで話し続けた。「二人はそのままフェンスの中に入って行った。あたしは隠れて待った。ずいぶん待ったよ。出てきたのは孝樹さんと世梨だけで、孝樹くんはシャベルまで持ってた。あの人をあそこに埋めたのね？」

遠山は僕が何も答えないことを確認すると、うなずいた。

「ねえ。殺したのは世梨だよ？孝樹くんじゃないよね？」

遠山は同情するような声色で言う。

「参ったな。全部合ってる。」

「正直に答えて。あたしはすべてを警察に話そうと思っている。でも孝樹くんまで裁かれるべきじゃない。世梨だけでいいの」

「…黙っていてはくれないのか？」

「できない」

力強い否定。僕はため息をついた。

「…お前は、吉川の友達なんだろう？」

遠山は自虐的な笑みを口元に浮かべた。

「たしかにそう思ってたよ。でも今は違う。絶対に許せない……」

遠山は呻くようにそう言って、下唇を破りそうなほど強く噛んだ。

「…なんでだ？」

僕に体を向けて座っていた遠山は、体の向きを正面に直し、しばらく中空の一点を見つめていた。僕は遠山が口を開くのをじっと待った。やがて遠山はおもむろに立ち上がり、ふらふらと歩いて、ブランコに腰を下ろした。僕は無言でそれを見送った。遠山は僕にちらりと目をやって、いじけた子どもみたいにブランコをキイキイと揺らしている。個人的にそういうシチュエーションはできれば勘弁していただきたいのだが、それでは話が始まらないようなので、仕方なく僕もベンチを離れて、遠山の隣のブランコに座った。ややあつて遠山が口を開く。

「あたしのうち、犬が二匹いたでしょ。大きいハウザーと小さなパシユミナ。覚えてる？」

「覚えてるよ」

二匹とも僕がまだ小学生で、時折は遠山の家遊びに行っていたころからいた犬だ。特にパシユミナは人懐こくて愛嬌のある、ぬいぐるみが動いているような犬で、どうしてこんなのが生きているのだらうと不思議に感じたことを覚えている。そのパシユミナが死んだことは、数ヶ月前に母親から聞かされていた。

「世梨がパシユミナを殺したの」

意味がわからない。

「そんなわけないだろう？」

遠山は首をぶんぶん振った。

「世梨がうちに泊まりに来てね、パシユミナがよく懐いてたの。人見知りしない子だったから珍しいことじゃないんだけど。世梨も可愛がってくれていたわ」

「だったら…」

「世梨が帰った日にパシユミナが死んだの」

遠山は視線を落として押し黙った。ふいに冷たい風が吹きつけて、僕の体を震わせた。

「獣医さんに診せたら、故意に毒を飲まされたみたいだって」

「でも、それで吉川が殺したって決め付けるのは短絡的じゃないか

「？」

遠山はうなづく。

「あたしもそう思ったし、そんなこと思いたくもなかったよ。…でもね、決定的なことがあったの」

あんまり聞きたくないな。

「世梨の誕生日にね、あたし、チーズケーキを焼いて持って行つたの。世梨は何故か誰にも家を教えたがらない子だから、学校で調べた地図を見ながら行つたの。びっくりさせようと思つて。夜よ。でもいまいち場所がわからなくて、あたしは適当な公園で一休みして地図を見てたの。そしたら、草陰にね、世梨がいたの。…何をしてたと思つ？」

「知らないよ」

遠山は恐ろしそうに肩を抱いて、ぎゅっと身を縮めた。

「猫を何匹も並べて、大きな包丁で順番に首を切り落としていたの…。あたしに気付かないどころか、周りなんか全然見えてないみたいだった……」

吉川のデイープレントな無表情が目には浮かぶ。

「怖くて、声も出せなかった…。逃げ出したかったけど、足がすくんで動かなかつた。あたしは這うようにしてなんとかベンチの裏に隠れて、ずっと、震えてた……」

僕は何も言う気が起こらずに、今も丸まって震えている遠山の首筋を見下ろしていた。

「もうわかつたでしょ？世梨は狂ってる。あの子は普通の人間じゃないの！悪魔よ！」

悪魔で。

「しかもあの子、学校じゃ姫とか言われてお嬢様面してるくせに、駆け込んだのはただのぼろっちいアパートだったわ！」

「…それは関係ないだろう？」

「そうかもしれないけど、もうそういうところも全部含めて世梨が憎いの！許せないのよ！」

遠山はヒステリックな感情を爆発させて、肩を激しく上下させながら両手で顔を覆った。僕は隣に座ったまま、それがおさまるのをただ待った。

「……だからあたしは、世梨を警察に突き出す。考樹くんは何も知らないって言うてくれればいいの。もし世梨が孝樹くんの名前を出したとしても、頭のおかしい奴の言うことなんて誰も信用しないよ、きつと」

遠山はブランコを降りて僕の真正面に立ち、手袋をはめた両手で僕の冷えた手を包んだ。

「だから、お願い。何も言わないって約束して。あたしは、孝樹くんを助けたいの」

僕は黙って遠山を見上げた。生真面目に結ばれていた遠山の口元が、やわらかく緩んでいく。

「変わらないね……。昔からそんな目してた。やっぱり、メガネしてないほうがいいよ」

「吉川にもそう言われたよ」

「……そんなに世梨が好きなの？」

僕は答えるかわりに遠山が目を逸らすまで見つめ続け、

「少し時間が欲しい」

と言って、ブランコを降りた。

チャプター 8

木曜日。

日中に『4:30』のメールを受信して、僕は吉川とロレンスに
いる。今日も客は僕たちしかいない。というよりも、僕はここで吉
川と老マスター以外の人間を見たことがないのだが、この店はそれ
で大丈夫なのだろうか。

この日はいつにも増して会話がなかった。冒頭に、

「DVD観た？」

「まだ」

という短い言葉を交わして以来、終始無言。老人が見ている水戸
黄門の再放送をBGMに、今日もホットコーヒーとホットココアを
飲む僕たちだ。

僕は遠山のことを話そうかと思っていたのだが、いつも以上に
つも通りな吉川を見ると、そんな気持ちは自然とどこかへ消え
去ってしまった。

遠山とはあの夜以来、一度も言葉を交わしていないが、毎日学校
で顔を合わせている。教室での遠山は僕にあまり注意を払っていな
いというか、意識的に僕を見ないようにしているようだった。時間
がほしい、と言った手前、近いうちにまた二人で夜の公園のブラン
コに乗りながら深刻な話をしなければならぬだろう。しかも、
今度は僕主導で。この三日間、僕は遠山の丸みを帯びたショートボ
ブの後ろ頭を視界の端に置きながら、憂鬱な気分で授業を受けてい
た。

フランス人形

僕は小さくため息をついて、半分飲んだコーヒークップにいつも
は使わないミルクを垂らし、スプーンでかき混ぜた。吉川は一瞬だ
け僕を見て、また無関心に目を逸らした。僕は壁にかけられたカレ

ンダーをぼんやりと眺めた。真っ白な雪山から朝日が顔を出す写真。五分ほど眺めてから、それが先月のカレンダーだということに気付いた。吉川はずっとこのひらにあごをのせて、窓ガラスの向こうの曇り空を見ている。暖色系の照明が吉川の頬をほんのりオレンジ色に染めていた。きれいな色だと思った。

「吉川」

「なに？」

「貸して欲しいものがある」

帰って吉川に借りたDVDを全部観た。

チャプター9

日曜日。夜八時。

僕は扉の鍵を開けて、吉川の父親が眠る荒地に踏み入った。

無風状態のしんとした、心地のいい夜だった。一ヶ月前のことを思うと、寒さもいくらか和らいだ。先週と比べても。もうすぐ三月だ。厚かましい冬も最後にはきちんとわきまえ、春は危なげなく訪れる。澄み切った夜空が雲ひとつの介人も許さず展開し、おびただしい数の星の群れが瞬き合って、その中心で完全な月が金色の光を放っていた。歩きながら僕は何度も大きく息を吸い込んで、エッジの効いたクリアな空気を体内に取り込んだ。

空き地の中心部、吉川の父親を埋めた辺りに差し掛かる。そこには黒い岩のような塊があつて、僕が近づくとそれはシュツと伸び上がり、人の形に変わって言葉を発した。

「こんばんは」

「…何してるんだ？」

「お墓参り」

僕はシャベルをもてあそぶ吉川の正面に立ち、背中の死体をそつと降ろした。

三十分前。

吉川が父親を刺した路地裏で、僕は遠山の首を絞めた。

金曜日に僕は遠山のノートにこんなメモを挟んでおいた。

『返事したいがもう少しだけ考えたい 日曜の夜 七時半に路地裏で』

そのメモは遠山を殺す前に回収した。死体と一緒に埋めるつもりだ。

吉川のリサーチによると、日曜の七時から八時に路地裏を通る人間はいない。イレギュラー因子は僕と遠山だけだった。それにあの路地裏は、小さい頃に遠山と遊んだ思い出の場所でもある。だからあそこで殺した。

「美奈、殺したんだ」

機械のような声音で吉川が言う。吉川が持っているシャベルは僕があらかじめ持ち込んでおいたもの。扉の鍵も数日前のロレンスで頼み込み、適当な理由をつけて吉川から借りていた。

「どうやって入った？」

「合鍵は二つ作るのが常識なのよ」

吉川はコートのポケットからキーホルダーを取り出して得意気に僕に見せる。それから僕のそばに来て、遠山の顔の近くに膝をついて、遠山の髪を静かに撫でた。

「美奈は私たちを見ていたの？」

「そうらしい」

僕は幼なじみの死体を見下ろす。

「警察に言っつて言い出したから、殺した」

吉川だけを告発しようとしていたことは伏せた。

「ひどいな。私の大切な『お友達』だったのに」

僕は何も答えずに墓穴を掘り始めた。

吉川はまったく僕を手伝おうとせず、土の上に座り込んでずっと、遠山の頬に触れていた。背中を向けていたので表情はうかがえなかったが、僕にはその黒い影がどことなく淋しそうに見えた。

遠山を埋葬して手を合わせてしまうと、僕と吉川は扉に向かってゆっくりと歩いた。

「DVD、全部観たよ」

「本当？」

「二回観た」

「うれしいな」

吉川は弾む声でそう言った後、一言も口を利かなくなってしまう。見ると、どうにも浮かかない横顔をしていたので、僕もそれ以上何も言わないことにした。

扉を出て鍵を閉める。

吉川が外灯の真下で足を止めて、いやに真剣な顔付きで振り返った。

「岡部」

「なに？」

「あんた、初めて殺したんだよね？」

「当たり前だろ」

「なのにそんなに落ち着いてるの？」

「言われて僕は自分の感情を確認する。」

「そうだね」

「……あんた、やっぱりおかしいわ」

吉川は優美な指先でこめかみを押さえた。最近見慣れている顔に、見慣れない要素が浮かぶ。

「吉川は、あれが初めてじゃなかったの？」

「初めてよ。だけど、あんたみたいじゃいられなかった」

「そうは見えなかったけど」

「……隠してたのよ。悟られないようにしてた。あんたじゃなければ気づくわよ。……でもあんたは、何も偽ってないんでしょう？」

「うん」

吉川は躊躇うように下を向いて、スニーカーのかかとで地面をガリガリと削った。様子がおかしい。

「ちゃんと確認しておきたいんだけど、……どうして、美奈を殺したの？」

「ブランコに乗りたくなかったんだ」

「…どういう意味？」

「冗談だよ」

吉川はあくまでシリアスに僕を見てくる。どうしてだろう。めずらしく僕は少し苛々しているようだ。このままだと何か余計なことを言ってしまうような気がする。そこで僕は頭を切り替えるために、目まで閉じて考えてみた。

僕は何故、遠山を殺さなければならなかったのか。
言葉をつむぎあげる。

「遠山は、僕にとっての不都合を招く可能性があったから。殺したかったわけじゃない。小さい頃から知ってる友達だった。ただ、それでも僕が生きていくうえで妨げになるものなら、消したほうがいいと思っただ」

「私も、妨げになるんじゃないの？」

吉川は言葉を用意していたのか、即座に、しかし、かすれた声で言った。

「そうだね」と僕は答えた。

「君は僕が殺人を犯したことを知る唯一の人物だ。もしも次に何らかの不都合が生じるとしたら、それはきつと、吉川のことだろうね」
「……そうよね」

吉川は僕の顔から視線のフレームを外そうとしない。僕も見返して、時間が経過する。

「でも、」

僕は吉川の瞳にわずかに浮かぶものが不安だということによややく気づき、嫌気が差して、耐え切れなくて視線を逸らし、思い直してまた見つめた。

「できれば僕は、君を殺したくない」

吉川は何も言わなかった。

ただ、すっと目を細めて、幻想童話のような笑顔を僕に見せた。

チャプター10

遠山美奈の失踪はしばらく世間を騒がせた。

連日、新聞やテレビのニュース番組で取り上げられ、様々な憶測がなされたが、警察ははまだ何の手がかりも掴めていないらしい。

黒柳にも取材陣が大挙押し寄せ、武田なんかは胴体だけでインタビューに答えていて、さらにそれを録画して喜んでいて、学校中のひんしゆくを買っていた。

僕は近所に住む幼なじみとして、吉川は高校で仲の良かった友人として、それぞれ警察に協力を求められたが、警察が僕たちから有益な情報を得ることはなかった。

地域住民が結託して、いたるところで遠山の写真入りのビラが撒かれた。部活の集合写真から拡大したそれはあまり写りのいい写真とは思えず、どうしてその写真が選ばれたのかは不明だが、もし遠山が見たら文句を言うだろうなと思った。遠山の両親はハウザーを伴い、悲壮な表情で声を囁らして、娘の消息に関わる情報を求めている。僕の母親も熱心に活動に参加していて、僕も何度が母親に乞われて駅前でビラを配った。吉川も彼女の言う『お友達』と連れ立って、制服姿で健気に遠山探しを手伝っていた。

そうしているうちに三月になった。

学年末テストも終了し、あとは進級を待つだけという一年間のおまけのような時期で、僕は今日も吉川とロレンスにいる。老人のしているテレビのチャンネルは水戸黄門（再）から大相撲春場所に変わった。

このところの姫は、毎週レンタルショップでフランス映画を三本ずつ借りてきて、それを僕に貸すのがお気に入りようだ。僕はそれを一週間以内に観て、感想文を添えて吉川に返却し、ついでにレ

ンタル料も支払わされている。何故だ。なかなか面白いとは思えないが、週に三本も観ているとさすがに詳しくもなる。

こうして僕と吉川の間に通話の話題が生まれた。

今日の吉川はネットから落とししたというA4用紙を携えている。

「明日の土曜日、先行レイトショーなのよ。岡部、この監督好きだつて言つてたでしょ？」

「好きとは言つてない。まだわかる気がするって言つただけだ。しかもそれどこの映画館だよ」

「東京。三時間もあれば着くわ」

「行きたくない」

「私のせいにしていいわよ」

またそれだ。そう言われたら僕は行くしかないことになっている。まったく、余計なことを言つてしまったものだ。

「決まりね。レイトショーだからゆっくりでいいわよ。時間は追つて連絡する。じゃあね」

そう言つて反対方向に歩き出した肩で弾ける黒髪を見送る。もうコートは着ていない。そろそろアイスコーヒーを飲んでみるのもいいかもしれないなどと考えながら、僕も自転車で家路につく。

二年生になることや、レイトショーもまあ別にいいのだが、僕にはひとつだけ、懸念しなければならぬ問題がある。

吉川に最初に借りた三部作。

一作目で主人公の女は、犬と猫を殺した。

二作目では、父親を殺した。

そして三作目で主人公は、恋人を殺し、友人を生埋めにし、友人の恋人を監禁して、卑屈な笑みを浮かべながら、エンドロールの闇

へと消えた。

ちり。

吉川は僕にどの役を与えるつもりなのだろうか。

チャプター10 (後書き)

はじめまして。松本 由樹彦と申します。

処女小説『フランス人形』お楽しみいただけましたでしょうか？
悪趣味なお話なので、気分を害された方もみえるのではないかと少
々気に病んだりもしています。

二人の物語はまだ始まったばかりです。続編もマイペースに執筆
中です。優柔不断ゆえ書くの遅いですが、近々また皆さまにご覧い
ただけるようがんばってまいります。

ありがとうございました。

以下、続編です

第二部 『デイナー』

<http://ncode.syosetu.com/n8765d/novel.html>

第三部 『ダリア』

<http://ncode.syosetu.com/n0293f/novel.html>

第四部 『ミルキー』

<http://ncode.syosetu.com/n7139g/novel.html>

ホームページをつくりました

<http://matsumotoyukihiko.jp>

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6504d/>

フランス人形

2009年4月21日08時15分発行